様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２１４２０

研究課題名（和文）ユニバーサルスポーツの理論及び学習プログラムの構築とその評価法の確立

研究課題名（英文）The study of the learning program and evaluation method of the "universal sports"

研究代表者
田中　愛（TANAKA, Ai）

武蔵大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０５０８５３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、「ユニバーサルスポーツ」の概念について検討し、その学習プログラムと評価方法を確立することであった。本研究では次の議論を中心的に取り扱った。1）スポーツ教育において「ユニバーサリティ」を達成する方法はあるか 2）身体の多様性とはどういうことか。これらの議論に基づいて、大学生が学ぶアダプテッドスポーツの授業における事例を取り上げ、その学習プログラムと評価方法を設計し、効果を検証した。結果として、スポーツにおける「ユニバーサリティ」はいくつかの方法で実現可能であることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine and clarify the concept of “universal sports”, its learning program and evaluation method through the phenomenological perspective.It requires the following discussions: 1) Are there ways to achieve universality in sport education? 2) What is a variety of human body?
Based on these discussions, the learning program and evaluation method are designed and examined its educational effects. Through this discussion, it is clarified that the idea of "universality" can be realized by some universal sports cases.

研究分野：体育哲学

キーワード：身体　多様性　ユニバーサルデザイン　アダプテッド・スポーツ　相互評価

１．研究開始当初の背景

スポーツ実践の多様性については、女性や高齢者、障害者といった、近代スポーツ種目において排除されてきた人々のスポーツ参加をテーマに議論が生じている。しかし、「女性」の場合にはジェンダー論が、「高齢者」や「障害者」の場合には専らその方法論が焦点となるため、多様な人々を受け入れる豊かなスポーツ文化の在り方を根本から問う議論にまでは発展していないようである。また、近代スポーツの競争原理に対抗する形で紹介された「ニュースポーツ」や「軽スポーツ」については、優れた授業実践例も多数紹介されているが、紹介された目新しいゲームを学習者がそのまま受け入れて利用することが前提とされており、学習者のスポーツに対する理解や、既存のスポーツ観を乗り越えるための葛藤が等閑にされていると言える。

アダプテッド・スポーツの分野にも方法論に関する研究成果の蓄積があり、今後は個々の種目の特性や固有の技能、ゲーム展開を踏まえた面白さ並びにその文化的価値に関する研究が求められる。申請者はシッティングバレーボールに関してその教育的意義を検証し、シッティングバレーボールが長くバレーボールを経験してきた者にとっても新たな身体文化として立ち現れること、また参加者がもともと持っている技能差を相対化する可能性があることを明らかにしているが、他の種目に関しては未だ研究の途上にあり、今後も議論の蓄積が望まれるところである。

２．研究の目的

本研究の目的は、「ユニバーサルスポーツ」の学習プログラムを構築し、その教育効果を検証することである。その意義は、過激な競争に結びつかざるを得ない「近代スポーツ」とは異なる価値を有する新たなスポーツ教材とその評価法を、「身体の多様なあり方」という視点を加えて模索する点にある。

広く人々がスポーツを実践しその魅力や本質に触れるためには、近代スポーツの競争原理と共存する形で、誰もが楽しめるという意味での「ユニバーサリティ」が具体化される必要がある。本研究は、理論的考察と授業実践を踏まえてその教材化に取り組むものである。

３．研究の方法

研究の方法は、学習プログラムについての授業実践（15 回×3 期）と、その理論的背景となる身体論についての文献研究、および現象学的考察である。当初の計画は、以下の 6 つの手順を踏むものであった。

（1）身体論のまとめと学習者のスポーツ観・能力観の特徴把握（1 年目、2 年目）

（2）ユニバーサルスポーツにおけるユニバーサリティの概念的明示（1 年目）

（3）アダプテッド・スポーツ各種目の教材的意義の検証（研究蓄積あり～1 年目）

（4）ユニバーサルスポーツの学習プログラム作成、試行、改良（2 年目）

（5）教育効果の検証方法についての検討（2 年目、3 年目）

（6）ユニバーサルスポーツ公開講座の開催（3 年目）→成果の公表・社会還元と連動

４．研究成果

以下では、当初計画した手順および方法をもとに得られた成果を、(1) 身体論とスポーツ、(2) ユニバーサルスポーツおよびアダプテッド・スポーツ各種目の教材的意義、(3) ユニバーサルスポーツの学習プログラム作成、試行、改良とその教育効果の検証方法についての検討（4）ユニバーサルスポーツ公開講座の開催の 4 つに分けて報告する。

(1) 身体論とスポーツ観

「スポーツ実践のための」身体論について、特にアダプテッド・スポーツに着目して現象学的に考察を行った。以下はその主要な業績である原著論文「スポーツ身体論の現象学的考察：アダプテッド・スポーツ実践に生じる「意味」としての身体に着目して」（体育・スポーツ哲学研究、３８巻１号、2016、37-50）を要約し、新たな身体論とスポーツ観について示したい。

「スポーツ身体論」は確立された論ではなく、「身体」についての論じ方は千差万別である。同時に、「身体とはなにか」という問いは、体育・スポーツ哲学に関する様々な議論に関わっており、常に検証し直すことが求められる。そこで本論では、「スポーツ身体論」の中でも「スポーツ実践のための」身体論に限定して考察を進める。この目的の内には、「スポーツ実践のための」身体論とは何か、という問いも含まれている。この限定の理由は、「スポーツ身体論」とその主題である「身体」についての論じ方の多様性にある。「スポーツ実践」がより幅広い人々を対象としつつ発展するための「身体」の捉え方を、多様な論の中から選び取り深化させることも、その役割の一つだと考えられる。従って、体育学・スポーツ科学領域における身体論を大きく「スポーツ身体論」とし、その中でもスポーツ「実践のための」身体論に焦点を当て、現象学的に考察することには十分に意義のあることだと言えよう。

また、スポーツ実践を対象とする際、近代スポーツの高度に競技化された側面にのみ焦点を当てるのではなく、より多様な人々が参加することのできるアダプテッド・スポーツを中心的に取り上げる必要がある。「スポーツ実践」の指す範囲を広げることによって、スポーツ身体論の適用範囲を広げることが可能となるだろう。

考察の結果、以下の結論が導き出された。①スポーツとアダプテッド・スポーツはどういう関係にあるのか、②「身体」と「障害をもった身体」はどういう関係にあるのか、と

いう２点について、「身体」と「からだ」を分けて論じるという現象学的な身体論を通して、②の問いについては「からだ」のレベルでは、医学的、自然科学的にはいかようにも線引きがなされるが、「身体」という視点を持てば分けることができないということが示唆される。この示唆に基づけば、①についてもその参加者を分けることができず、そうであれば近代スポーツの例外的存在であったアダプテッド・スポーツもまた、スポーツの一つに位置づくことがわかる。最終的に、スポーツ実践のための身体論の対象は、「意味としての身体」であることが明らかとなった。

次の点は本研究の議論の限界だと言える。すなわち、第４節で検討したとおり、身体にはあらゆる道具を身体化し、意味を生じさせる力がある。このことは、人間の日々の生活を支えている道具に対してのみならず、スポーツ実践において有利なパフォーマンスをするために開発された特殊な道具に対しても、同様に当てはまることとなる。そうであれば、どこまでが「その人の身体」として分離不可能であるのか、どこからが競技における公平性の問題として審議せねばならないか、については新たな争点となるかもしれない。この点については本研究の範囲を越えるが、しかし今後検討されねばならない倫理的な問題となるだろう。

アダプテッド・スポーツは、文字通り人に合わせて形を変えていくことができる、柔軟なスポーツである。また、参加者が実践の際に身体の隠れた能力に気づいていくプロセスを含むという点で、発展途上にある、一つの新しいスポーツの在り方だと指摘できる。物理的、肉体的な困難を抱えたとしても、「able」すなわち「できる」を一つ一つ手に入れていくプロセスを経るという意味で、アダプテッド・スポーツのプレーは、「身体」が柔軟で、常に変わり続けることが可能であるということを示してくれる。アダプテッド・スポーツが、競技化のみならず、より多くの人を参加させるきっかけを与えてくれるなら、スポーツ身体論もまた、より柔軟で可能性のある「意味としての身体」について論じる必要がある。

（2）ユニバーサルスポーツおよびアダプテッド・スポーツ各種目の教材的意義

ユニバーサルスポーツ学習プログラムを構成する中心的な種目としてシッティングバレーボールを挙げることができる。ここでは、シッティングバレーボール選手へのインタビューを行い、障がいを持つ人と、障がいを持たない人が、ともにインクルージョンされる状況について考察した。（考察した内容をもとに、「What does “inclusivity” mean while playing sitting volleyball? : focusing on the competition between disabled and nondisabled players」（22nd Annual congress of the European College of Sport Science、 2017）というタイトルの学会発表を行った。）

ユニバーサリティの下では、障がいを持つ人と持たない人のいずれかがいずれかを含みこむ、という関係ではなく、両者が並行して存在することが窺える。また、その中でも、バレーボール経験者がプレイヤーとして自らの役割を見出すことができる一方、バレーボール競技未経験者も一定数参入し、積極的にプレーしていることは、シッティングバレーボールの特性上、必然的に生じてくる状況である。このように、技術レベルが上がり、競技性が高まることによって、参加者間の「障害者―健常者」の区別は相対化され、次第に意識されなくなっていく可能性も示唆される。

シッティングバレーボールは近年、日本国内でも徐々に普及し、同時に競技志向も高まりを見せている。座ってしまえばだれもが対等に戦える、とも謳われている。本研究における６人の語りからもそのことを伺い知ることができた。障害の有無、バレーボール競技経験の有無にかかわらず、一つのチームを成して試合に挑むことができるという点はユニバーサリティの特徴に合致している。とりわけ本研究では、バレーボール経験の有無にかかわらず、健常者が、サポート役や指導者ではなく、いちプレイヤーとして積極的にプレーに参入し、そのことによって「障害者―健常者」の関係を相対化している様子が明らかとなった。またその激しい競争の中で、結果的に障害の重いチームメンバーへのプレーを通したカバーリングも生じていることがわかる。

ここで残された課題として、シッティングバレーボールの競技人口が増え、競技者層がより多様になることによって、インクルージョンにどのような変化が生じるのか、あるいは「障害者―健常者」の関係が相対化された後に、新たな概念が創出する可能性が示唆された。

（3）ユニバーサルスポーツの学習プログラム作成、試行、改良とその教育効果の検証方法についての検討

大学体育における授業および学習を評価する方法について、学生間相互評価の可能性を踏まえて再考した。大学体育の評価方法としては、授業後のレポートを用いることが一つの有効な方法であろう。学生の活動内容を質的に捉えるという意味で、数値や記録による評価ではなく、彼らの学びの内容を示す言葉の内容を吟味することは、とりわけ大学教育の中では有効かつ重要な方法であると言える。

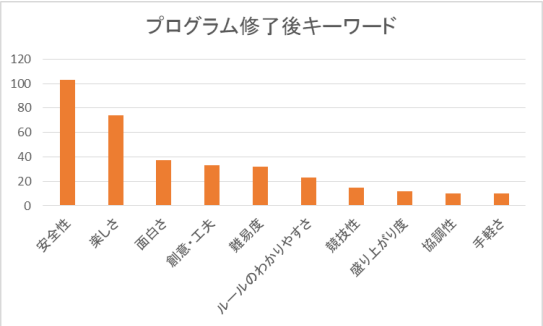
しかし、レポートによる評価の場合、履修者の利害すなわち「評定（単位が取得できるかどうか、好成績を得ることができるか等）」との関係を考慮する必要が生じる。つまり、

よい評定を得るために実際の学習内容とは違う言葉や、授業者が期待する言葉を恣意的に使う可能性も否定できない。従って、レポート内容を用いて評価することに加え、それとは異なる方法で相補的に学生の活動を評価していくことが必要となる。ここでは、その一つの可能性として「学生間相互評価」を取り上げた。

具体的な評価方法は、各個人が、評価の観点を３つ設定し、それらの観点から各グループが考案した種目を評価するというものである。３つの観点を各自設定することとしたのは、最もユニバーサルなスポーツを選考させることによって、スポーツの本質について自分なりに振り返る機会を確保するためであり、評価という行為を通してスポーツやユニバーサルスポーツに対する理解を深めるためである。

プログラム修了後のキーワードのうち頻出したものをグラフに示す。また、その他にユニバーサルスポーツの特徴をよくとらえたキーワードが以下の表である。

【グラフ】プログラム修了後キーワード




【表】学生間相互評価によるキーワード

| | |
|---|---|
| 必要な身体能力 | ルールの分かりやすさ |
| 誰でもできる | 新感覚 |
| 身体に障害のある人でも参加できるか | 身体能力が劣る人でも参加できるか |
| フィールドの活用具合 | すぐに出来るようになるか |
| 安全 | スポーツとしてのゲーム性 |

相互評価に用いるキーワードから、ユニバーサルスポーツへの理解の深まりが示唆され、さらに授業目的に応じた「評価キーワード」を設定することの有効性が示唆された。なお、この内容は、「大学体育における評価方法の再検討―学生間相互評価の可能性」と題し、日本スポーツ教育学会第 36 回大会にて発表済であり、現在原著論文の投稿準備中である。

（4）ユニバーサルスポーツ公開講座の開催

研究計画時に掲げた「公開講座の開催」に関しては、本研究の成果をもとに中学校の体育授業において出前講座（「シッティングバレーボールの多様な動きを楽しむ」）を行ったほか、他大学での「ユニバーサルスポーツ」授業に本プログラムを提供し、一定の評価を得ることができた。成果の公表・社会還元という目的がある程度達成できたと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

①田中　愛、スポーツ身体論の現象学的考察：アダプテッド・スポーツ実践に生じる「意味」としての身体に着目して、体育・スポーツ哲学研究、３８巻１号、2016、37-50（査読有）

②田中　愛、体育・スポーツのユニバーサルデザインに関する基礎的研究、武蔵大学人文学会雑誌、48 巻１号、2016、31-47（査読無）

〔学会発表〕（計　9　件）

①TANAKA, Ai、The Joy of Difficulty in Sport Practice: Phenomenological Considerations 、 International Association for the Philosophy of Sports 46th annual conference、 2018（抄録受理済）

②田中　愛、学校体育で育てる身体を考える（２年目）

日本体育・スポーツ哲学会第４０回大会（シンポジウム演者）、2018（登壇予定）

③TANAKA, Ai、What does “inclusivity” mean while playing sitting volleyball? : focusing on the competition between disabled and nondisabled players、 22nd Annual congress of the European College of Sport Science、 2017

④田中　愛、大学体育における評価方法の再検討―学生間相互評価の可能性―日本ｽﾎﾟｰﾂ教育学会第 36 回大会 2016

⑤田中　愛、「身体的可能感」から見た「できる」についての考察　体育哲学専門領域夏

期合宿研究会　2016

⑥田中　愛、ユニバーサルスポーツの構想―「身体の可能性」を理解するために―日本スポーツ教育学会　第35回記念国際大会2015

⑦TANAKA, Ai、The study of “bodily sense of ability” in sports practice: The interpretation of the phenomenological term “I can”、International Association for the Philosophy of Sports 43rd annual conference、 2015

⑧田中　愛、スポーツ身体論の多角的検証：アダプテッドスポーツの発展可能性を踏まえて、日本体育スポーツ哲学会第37回大会、2015

⑨TANAKA, Ai、A study of “universal sports” from a phenomenological perspective：in relation to the varieties of human bodies、 The 20th annual Congress of the European College of Sport Science、2015

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　愛（TANAKA, Ai）
武蔵大学・人文学部・准教授

研究者番号：10508534

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）